

Robert
Carlo

亀崎直樹・小守桃世・堀越和夫

Naoki, KAMEZAKI, Momoyo KOMORI and Kazuo HORIKOSHI

孵化直後のタイマイ幼体の飼育下での成長に関しては、亀崎(1994)の総説によるとこれまで世界各地で9例の報告がある。その9例の成長速度は非常にばらついており、例えば、直甲長20cmに達するのに孵化後8カ月しか要しないものもあれば、孵化後20カ月以上を要するものもある。このような成長速度の違いは、餌料や水温など飼育環境の違いに起因すると一般に考えられてはいるが、未だ詳細に調べられてはいない。

一方、近年標識放流によって野生におけるタイマイの成長も調べられるようになってきたが、野外における成長速度も個体変異が大きいことが知られており(Boulon, 1994; Limpus, 1992)、本種の成長のより詳細な研究が望まれる。

そこで、今回は沖縄で得られた卵から孵化したタイマイ幼体2個体を飼育し、比較的詳しく成長を観察したので報告する。

方法

タイマイの幼体は、1995年の7月15日に宮古諸島と八重山諸島の間位置する多良間島の北方にある水納島で採卵した卵を孵化させて得た。孵化は発泡スチロール製の簡易孵化箱で行われ、8月30日に孵化した。孵化後、2個体を小笠原海洋センターへ移送、飼育した。それぞれの個体はNo. 1とNo. 2と認識し、ある程度成長してからYA14000とYA14718の標識を付けて個体識別した。

飼育開始後約1年間の飼育水槽は、1.3m × 1.5mの広さのものをいい水深は30cmに調節した。その後1.3m × 4.7m、水深は45cmに調節した水槽に移した。1997年11月以降は、4.8m × 4.5m、水深は45cmの水槽で飼育した。飼育海水は沿岸より汲み上げ、ろ過槽を通さず直接使用した。飼育水温は毎朝8時に計測した。タイマイを飼育開始した95年9月から98年3月までの飼育水の月別平均水温の変化を図1に示した。

供した餌料は、初めの3ヶ月間は冷凍オキアミを主体としてマグロ魚肉、ニジマス用配合飼料(オリエンタル酵母工業)、総合ビタミン剤を添加した‘ねり餌’を飽食するまで1日3回給餌した。その後、ウナギ用配合飼料(日清製粉)と養魚飼料(オリエンタル酵母工業)を合わせた‘ねり餌’を1日2回給餌した。それ以降は、ニジマス用配合飼料(オリエンタル酵母工業)を寒天液で固めたものを1日1回の給餌し、これにコイ用配合飼料(Mサイズ:日清製粉)の浮餌を2回給餌している。

また、成長を記録するため、標準直甲長(SCL)、直甲幅(SCW)、体重(BW)をほぼ1カ月に一度記録した。また、2枚の臀甲板の間の切れ込みが明瞭になったところで、最小直甲長(MCL)も記録した。ここでは標準直甲長(SCL)と体重(BW)のみを議論することにする。

結果と考察

1. 成長

飼育したタイマイ2個体の成長を示す測定値（標準直甲長、体重）を表1に、その成長曲線をグラフ（図2、図3）に表した。

図2、図3から、成長が速い時期と遅い時期が繰り返されていることが判り、図1の飼育水温の変動から、その成長速度は主に水温に起因することが明らかである。より詳細に直甲長の成長を図2で見てみると、飼育開始直後1カ月の成長は余り芳しくないが、2ヶ月目の成長は速くなっていることがわかる。このタイマイは亀崎が孵化させた後、数日間、魚肉を与えられてたが、小笠原海洋センターに移動させたのちオキアミ主体の餌料へと変わった。この餌の転換がこのような成長速度の低下を招いた可能性もある。また、餌料の変化に加え飼育環境の変化あるいは輸送が、最初の1カ月の成長に影響を与えたことも考えられる。その後、新しい環境に馴致したのか、2ヶ月目（10-11月）は急速な成長をみている。しかし、飼育水温が冬期24度以下になると成長の低下が見られ、翌年の冬期の低水温でも同様な傾向が見られる。また、体重の成長曲線（図3）も同様な傾向を示している。これは、本種が環境の温度によって成長を変化させることを示している。

30ヶ月後に既に標準直甲長は50cm以上、体重は約16kgに達しているのは、これまで記録されたタイマイの成長の中では最も速い記録である。

2. 成長速度の変化

図2、図3に示した成長曲線から、夏期環境水温が24度以上になると成長が速く、冬期に成長が遅くなることが明らかにはなったが、さらにそれを詳しく見るために測定日から次の測定日までの成長から直甲

長と体重の成長速度（/年）を求めた（表1）。また、その月毎の変化をグラフに示した（図4、図5）。すると図2、図3の成長曲線では見ることも出来なかった成長速度の変動を見ることが出来る。まず、甲長の成長速度の変化（図4）をみると成長速度の早い時期はおおよそ3つの時期に見られる。すなわち、飼育開始直後の10月、翌年（1996年）の8月頃（この時速い成長をしめたのはNo.2のみ）、さらに1997年の6月である。この時期はいずれも夏期の水温が高い時期であるが、その成長速度のピークを示す月が1996年と97年で異なっている原因はわからない。このように異常に速い成長速度を示す月以外は、水温が24℃を越える夏期は200-300mm/年の成長速度で、冬期は100-200mm/年の成長速度で成長することがわかる。ただし、このように速い成長速度は自然界ではこれまで得られておらず、飼育下という高栄養の特殊条件下での成長速度であることを確認しておきたい。

一方、体重の成長速度を図5でみると、必ずしも夏期と冬期で成長速度が変動していないことがわかる。つまり、孵化後500-600日は図1からも低水温期であることが分かるが、この間の体重の成長速度は相対的に速い。一方、逆に孵化後650-700日は高水温期にも関わらず相対的に遅い成長速度を示している。体重の増加は餌料の摂取量の他に代謝量も関係する。従って、水温の高い夏の代謝速度は高く、低い冬は低いことも予想され、それが夏の低成長速度や冬の高成長速度につながっている可能性もある。

このように、これまで一般に考えられていたように水温の低い冬期は低成長、水温の高い夏は高成長という概念は甲長の成長という点からはある程度あてはまるものの、

体重については必ずしも妥当なものとは言えない。つまり、体重の成長速度はあまり水温の変化に連動せずに変動していることが明らかになった。いずれにせよ本研究はタイマイの成長をこれまでの研究に比較し

て、より細かく追跡した点で価値のあるものと考えられる。

甲長と体重の成長速度の関係

直甲長と体重の成長速度を図4と図5で

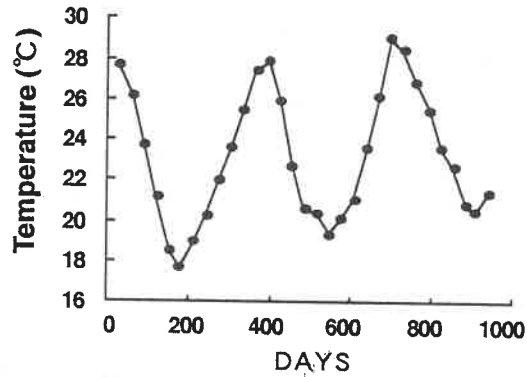


図1 飼育水温の変動。
プロットは月平均水温を示す。

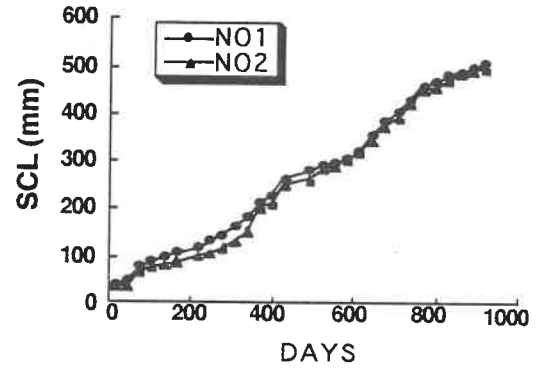


図2 標準直甲長(mm)の成長曲線

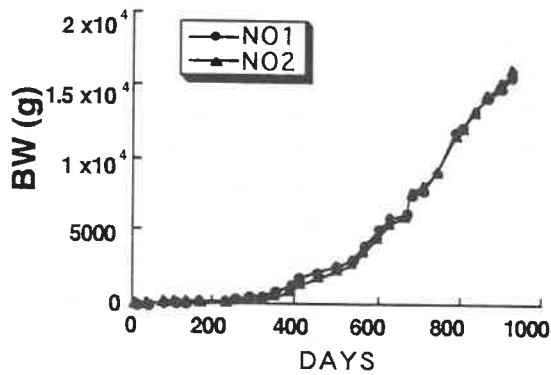


図3 体重(g)の成長曲線

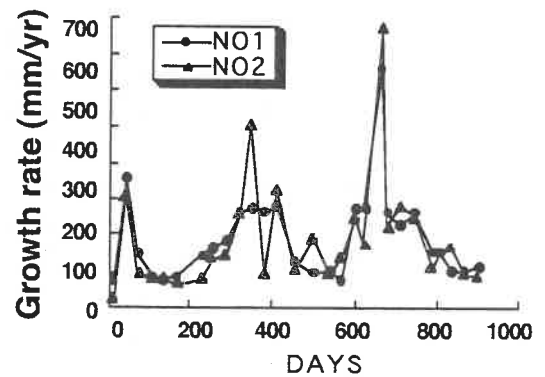


図4 直甲長成長速度(mm/year)の変動

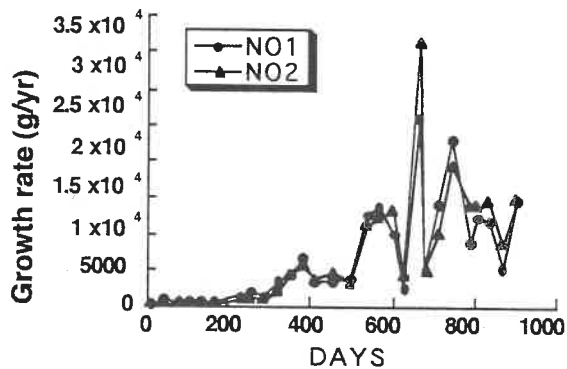


図5 体重成長速度(g/year)の変動

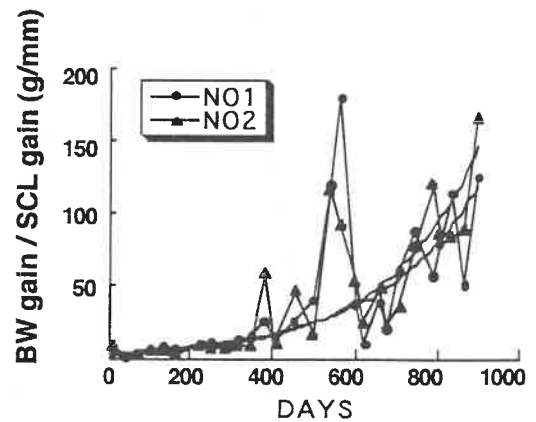


図6 成長様式の変化 (詳細は本文)

比較すると、両者の成長速度の変動が必ずしも一致するわけではないことが判る。つまり、甲長を伸張させずに体重を増加させる月もあれば、逆に体重よりも甲長を増加させる月もあるように見受けられる。そこで体重の増加量を甲長の増加量で割った値

の変化を図6で示した。これが凸になっているところは甲長より体重を増加させた月(肥大成長)、また、凹になっているところは体重より甲長を増加させた月(伸張成長)を示している。特に顕著なのは孵化後500-600日(97年2-3月)に見られる肥

表1 タイマイ幼体2個体(No.1:YA14000とNo.2:YA14718)の成長。
SCL:直標準甲長(mm), BW:体重(g)。

測定年月日	孵化後 日数	YA14000				YA14718			
		SCL (mm)	Bw (g)	成長速度 (mm/yr)	(g/yr)	SCL (mm)	Bw (g)	成長速度 (mm/yr)	(g/yr)
1995/8/30	0	-	-	-	-	-	-	-	-
9/12	13	40.0	14	76.8	305	38.2	12	21.4	171
10/11	42	46.1	38	359.5	660	39.9	25	309.7	340
11/13	75	78.6	98	153.3	473	67.9	56	92.5	242
12/13	105	91.2	137	90.0	481	75.5	76	84.0	382
1996/1/12	135	98.6	177	75.3	543	82.4	107	79.8	334
2/13	167	105.2	224	91.6	482	89.4	137	68.7	176
4/12	226	120.0	302	146.0	1422	100.5	165	80.6	755
5/11	255	131.6	415	167.0	1825	106.9	225	134.9	995
6/13	288	146.7	580	184.9	1217	119.1	315	147.2	913
7/13	318	161.9	680	267.3	3415	131.2	390	266.1	2237
8/13	349	184.6	970	274.2	4242	153.8	580	505.1	4341
9/19	386	212.4	1400	263.4	6507	205.0	1020	95.2	5554
10/12	409	229.0	1810	279.0	3407	211.0	1370	324.4	3731
11/26	454	263.4	2230	129.0	3326	251.0	1830	105.4	4867
1997/1/10	499	279.3	2640	99.9	3998	264.0	2430	191.2	3215
2/21	541	290.8	3100	105.3	12635	286.0	2800	96.9	11231
3/19	567	298.3	4000	76.4	13688	292.9	3600	138.0	12547
4/20	599	305.0	5200	277.4	10220	305.0	4700	248.2	13140
5/15	624	324.0	5900	278.1	2607	322.0	5600	173.8	4345
6/26	666	356.0	6200	665.6	25765	342.0	6100	772.9	36500
7/13	683	387.0	7400	264.3	5034	378.0	7800	226.6	5034
8/11	712	408.0	7800	233.2	14194	396.0	8200	283.9	10139
9/16	748	431.0	9200	263.1	22919	424.0	9200	254.7	19523
10/29	791	462.0	11900	159.7	9125	454.0	11500	114.1	13688
11/14	807	469.0	12300	159.7	12547	459.0	12100	159.7	13688
12/16	839	483.0	13400	104.3	11732	473.0	13300	169.5	14339
1998/1/13	867	491.0	14300	107.4	5368	486.0	14400	96.6	8588
2/16	901	501.0	14800	116.8	14600	495.0	15200	87.6	14600
3/13	926	509.0	15800	-	-	501.0	16200	-	-

大成長であり、この時期にタイマイは2個体ともより体重を獲得したと考えられる。このように甲長の成長と体重の成長が必ずしも一致していないことは、タイマイはそのサイズを均等に成長させているのではないことを示しており、このような成長様式の違いが何に起因するものかは今後の研究課題である。

文 献

Boulon, R. H. Jr. 1994. Growth rates of wild juvenile hawksbill turtles in St. Thomas, United States Virgin Islands. *Copeia*, 1994(3): 811-814

亀崎直樹. 1994. タイマイ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (1). IV. 両生類・爬虫類. 水産庁: 479-491.

Limpus, C. J. 1992. The hawksbill turtle, *Eretmochelys imbricata*, in Queensland: Population structure within a Southern Great Barrier Reef feeding ground. *Wildl. Res.*, 19: 489-506

亀崎 (京大・人間・環境)

小守・堀越 (小笠原海洋センター)

放流後10年経過して再捕されたタイマイ
A Case of Recaptured Hawksbill Turtle, *Eretmochelys imbricata*,
10 Years after Release.

黒柳賢治 亀崎直樹

Kenji KUROYANAGI, Naoki KAMEZAKI

1997年11月16日、石垣島南部海域において一頭のタイマイが再捕された。その個体には左後肢にプラスチックタグが装着されていたが、1991年より日本ウミガメ協議会において使用されている統一タグの通しナンバーではなく、「黒島海中公園52」と刻印されていた。この個体は標識番号から、1987年4月4日、当時研究員をしていた亀崎が黒島北部より標識放流した個体であることが判明した。標識再捕個体としては、放流と再捕の間が10年以上とかなり経過しており、タイマイの成長や標識の耐久性を考える上でも貴重な例だと考えられるのでここに報告する。

放流時(1987年4月4日)の計測値は、標準曲甲長:473mm、標準曲甲幅:433mm、体重:8.8kgであった。一方、

3879日後の石垣島近海での再捕時(1997年11月19日)の計測値は、標準直甲長:667mm、直甲幅:498mm、体重:33.95kgであった。ここで、曲甲長(CCL)・曲甲幅(CCW)から直甲長(SCL)・直甲幅(SCW)を算出するために、これまで得られた21個体のデータから換算式を求めた。その結果、
 $SCL = 0.945 \times CCL + 6.93$ ($r = 0.989$)
 $SCW = 0.790 \times CCW + 26.1$ ($r = 0.989$)
が導かれた。この式から算出された放流時の直甲長は454mm、直甲幅は368mmであった。これから、本個体の成長速度を求めると20mm/yrであり、これまで八重山にて報告された2例、55mm/yr (Kamezaki, 1987) 及び66.8mm/yr (亀崎ら, 1997) よりかなり遅い。これは本個体が再捕時には667mmとかなり成長して

おり、そのサイズになると成長が遅くなることに起因するのではと考えられた。また、本個体はこれまで報告された本種の産卵上陸サイズより小さく(宮脇,1981)、外観からも性成熟に達していなかったものと思われ、放流時の甲長にはふ化後少なくとも3~4年は要することから、本種はふ化後13~14年経過しても性成熟しないことが示唆された。また、本個体に装着された「黒島海中公園52」と刻印されたタグ(Dalton社製、プラスチックジャンボタグ)は10年以上経過しても刻印が明瞭で(No.部は最も摩耗が激しいと報告のある下板下面)(村山,1998)、後肢の装着部位(本個体は後肢付け根に近い肉の部分に装着)とともに本種の幼体ではかなり有効な標識であることが確認された。

本個体は「黒島海中公園52」のタグはそのまま、新たに右前肢へジャンボタグを左前肢にインコネルタグを装着して1997年11月19日に石垣島南部新川川(あらかわがわ)河口にて放流した。

尚、本研究の一部は日本べっこう協会からの研究費により実施されたことを記しておきたい。

文献

- Kamezaki, N. 1987. Recapture of the hawksbill turtle, *Eretmochelys imbricata*, in the Yaeyama Islands, Ryukyu Archipelago. *Galaxea*, 6:17-20.
- 亀崎直樹・横地洋之・浅井康行. 1997. 西表島近海におけるタイマイの成長例. うみがめニュースレター, No33:6.
- 宮脇逸朗. 1981. 八重山列島黒島で産卵するウミガメ類. 海中公園情報, 53:15.
- 村山堅一・堀越和夫・佐藤文彦・山口真名美・小守桃世・菅沼弘行・立川浩之. 1998. 小笠原で行われた標識放流: プラスチックタグの耐久性について. うみがめニュースレター, 35:8
- 黒柳 (八重山海中公園研究所)
亀崎 (京大大学院人間環境学研究科)

牧逸馬さんの死を悼む

Mourning for Mr. Itsuma MAKI

菅野 健夫

Takeo KANNO

牧逸馬(まき・いつま)さんは、屋久島の永田で生まれ育った方で、島内ではそれほど知られた人ではなかったが、屋久島のウミガメ保護の発端を開いた人であり、ここに、当時の様子を記録しておくことも意義のあることと思う。

特に定職を持たなかった彼は、私に釣りの手ほどきをしてくれ、暇があるといっそに釣りをするのが常であった。1年間みっちりミャク釣りを仕込まれ、その後は、

私なりのバリエーションを加えて釣りを楽しむことが出来た。この、ミャク釣りの成果により、集中力を持続する能力がえられ、その後就職した会社の親睦会で行われた「ポーリング大会」でボールを転がし、優勝したのもこのおかげであったようだ。

彼は、メジロ籠とウグイス籠の作り方も教えてくれた。釘は一本も使わずに丈夫な籠を作るのが、彼の得意技術であった。メジロの捕まえ方の秘伝に似たものまで教え

てもらい、感心したこともあった。働き者であったが、唯一の欠点は、酒を飲み過ぎる傾向にあったことである。とはいえ、私も好きな方で、当時誓っていた禁酒が、なし崩し的に解禁となってしまったのも、彼のせいというか、彼のおかげであったのである。いなか浜にゆく途中に「えべすさま」があり、そこにお神酒をそなえて、お余りを戴くという名目で、少しまた少しとアルコールが復活したのであった。

私が彼に付いて、永田区(村)の「いなか浜」にウミガメを見に行っただのは、1976年5月9日のことであった。牧逸馬さんに、ウミガメの産卵についての基礎知識を教えてもらいながら、卵掘りの手伝いをして夜を過ごすようになった6月25日の夜中(午前3時頃)、アオウミガメの産卵に出くわした。それまでは奄美諸島以南に産卵するといわれていたアオウミガメの産卵分布を塗り替える快挙であることを、逸馬さんに伝えたが、彼は、大した感動は呼ばなかったようであった。

しかし、ウミガメの産卵地として、いなか浜がたいへん重要な場所であり、大産卵地であることに気付き、2年目の1977年から本格的な調査を始めた私に、浜のすべての管理を任せてくれた牧氏であった。そして、その結果、相当の卵を盗掘から守り、保護のための調査をすることが出来た。

2年間、牧逸馬さんが砂浜の権利を買い取ってくれ、ウミガメの調査をした結果、その地の重要性がさらに明らかになったため、3年目の1978年には、「いなか浜」は上屋久町の教育委員会が、ウミガメ保護区

に指定し、私が管理を任されることになった。5月から7月までは夜の浜に出てウミガメの産卵を調査し、8月から10月までは、稚ガメの孵化の調査を続けてたちまち3年目が過ぎていった。

1円の金ももらわない保護活動は、やはり限界があり、貯金が底をついた3年目の終わりには、私は屋久島を去らざるを得なくなった。

その後は、私のウミガメ保護の考えを支持してくださった大牟田幸久氏が「ウミガメを知ろう」(1981)という啓蒙書を作成され、ウミガメ保護運動は鹿児島県全体に広がることになった。そして、屋久島・永田区のウミガメ保護・調査・研究の活動は、大牟田一美氏が中心となって今日まで継続され、様々な成果を挙げられてきていることは、皆様もご承知のことと思います。

ただ、忘れていただきたいくないのは、鹿児島県のウミガメ保護の第一歩を踏み出すにあたって、牧逸馬さんの理解と協力が不可欠であったということです。

惜しくも、牧逸さんは、昨年(1977年)の春(3月10日)、突然亡くなくなりました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。竜宮城にゆかれて、カメさんと酒を酌み交わし、乙姫様に叱られているのではないかなどと、不謹慎にも想像しております。そのうち私も合流させていただきます。

合掌。

(千葉県船橋市)

第18回ウミガメ生物学と保全に関する国際シンポジウム参加の感想
Impression on 18th International Symposium on Sea Turtle Biology and Conservation

馬場智成
Tomonari BABA

3月3日から7日にかけてメキシコ、マサトランのホテル“El Cid Mega Resort”において、“18th International Symposium on Sea Turtle Biology and Conservation (第18回ウミガメ生物学と保全に国際関する国際シンポジウム)”が開催されました。参加者は44ヶ国736名以上、そして115の口頭発表と153のポスター展示が各セッションごとに行われました。

現在東京水産大学2年で、うみがめ研究会に所属している私は、今世界でどのような研究が成されているのか、そして他国の学生はどのようにウミガメに取り組んでいるのかなどを知るにより、東水大うみがめ研究会の方向性を見いだせればと思い、参加をいたしました。ウミガメに興味を持ち始めてまだ日の浅い私は、少ない知識と経験の中で何が話せるのかなどを考えてはいたのですが、英語があまり理解できず、プログラムを見て聴きたいなと思う話なども、残念ながら完全には理解できませんでした。

今回の発表では世界各地の産卵場調査報告が多かったのですが、セッションの多さからも分かるように、さまざまなタイプの研究が成され発表されていました。現在ウミガメはいろいろな角度で研究がなされていると同時に、まだまだやることはたくさんあると感じました。その中でもFibro-papillomatosisの知識が無かったことと同時に、興味深いスライドを何枚も見たいという点で最も印象に残りました。

シンポジウムは発表だけでなく、ブースを設けてウミガメ関連のものを販売したり、オークションやダンスナイト、バンケットのようなイベントも行われ、それぞれ盛り上がりを見せ、このようなイベントを設けることが、情報交換の場として多いに役立っていると感じました。5日間のシンポジウムは国際的な会議ではあると同時に、ウミガメという一つの対象に関心を持った世界中の仲間の集まりとして終始和やかに進んでいました。

今回初めてシンポジウムに参加しまして、自分の不勉強さを痛感しましたが、ウミガメに関する研究の現状と、その研究者たちの発表や議論を味わうことはできました。また自分の中に何か先の目標や楽しみが生まれ、今後の活動に十分役立つとても良い刺激になりました。

最後に京都大の松沢慶将氏の発表である“Sand Color, Temperature and Sex Ratio of Emerging Hatchling on Logger-head's Nesting Beach in Japan”の入賞おめでとうございます。そしてこのシンポジウム参加の話とうみがめニュースレターに書くことを勧めてくださった菅沼弘行氏、ありがとうございました。

(東京水産大学水産学部資源理学科2年
うみがめ研究会)

静岡県相良町カメハメハ王国の紹介
On the Kingdom KAMEHAMEHA in Sagara Town, Shizuoka Prefecture

山本明夫
Akio YAMAMOTO

静岡県御前崎の北約10kmに位置する人口2万7千、面積58平方キロの相良町に存在するカメハメハ王国は、総延長7kmの海岸線うち5kmが砂浜で、そこに産卵するアカウミガメを保護しようと昨年の8月に王国として建国されました。

カメハメハ王国の名の由来は（酒を飲みながらただゴロが良いというのでつけたのだが）アカウミガメが孵化して、遠く南洋の海で育ち、成長して親ガメになって戻ってくる所から、ハワイの偉大なカメハメハ大王の名を頂いて、どうせやるなら王国にして、会員は国民、会費は税金として、みんなで遊んじゃえという事でスタートしたわけです。

カメを保護する事もさることながら、この王国の目的は、『アカウミガメというものをとおして、知らず知らずのうちに踏みにじっているかもしれない自然の存在を多くの人に感じ取ってもらおう事』です。たとえば堤防や階段によって産卵が失敗した事などを話題にあげて、人の安全の為の堤防の建設と、アカウミガメが過去1億年以上もかけてきた産卵から孵化へのドラマという事実を論議することなど、カメや自然からの視点で物事を見ると、今まで気が付かなかった事実が見えて来る事を多くの人々、特に次の世代を担う子供達に知ってもらおうという事なのです。

また、スタッフも『今だから出来る事』『今しか出来ないかもしれない』という危機感が強く、事業に積極的に取り組んでおります。

ですから、当王国の組織は6名のスタッフにより運営されていますが、本年（1998年）は、①自然観察会（1月に終了・地域女性の会主催に参加、その時指導してくれた自然保護協会の方や日本野鳥の会の方々とのコミュニケーションを図る事ができた）、②カメハメハブレスの発行（アカウミガメに特化した情報誌：隔月発行）、③インターネットホームページの掲示（上陸産卵をリアルタイムで提供）、④ただいま上陸中で～す！連絡しちゃうシステム（毎日の午前4時の巡回に産卵中の場合、希望者に携帯電話で知らせるシステム）、⑤もしかしたら、今夜上陸するかもしれない・・・連絡しちゃうシステム（これは、上陸、産卵の確率を予測して、希望者に連絡するシステム・・・これにより、会員が夜間、注意事項を守って無作為に監視活動をするので、盗掘等の危険が少なくなる）、⑥アカウミガメ観察ツアー（遠距離で上記の2システムを利用できない会員には、土曜日の確率の高い日を選定して、皆で海岸ツアーを行う）、⑦先進地視察（本年は名古屋水族館とサンクチュアリ・ジャパンさんを計画中）、⑧建国祭（年に1度のお祭りで子ガメの放流会も兼ねて行う）などの企画をしています。

現在、登録国民は約130名を数えており、先日は『竜宮城清掃と玉手箱開陳』というわけの分からない事業（案内を出したら問い合わせが殺到した！海岸清掃とカメハメハ宣言唱和、相良海岸の貝を利用したキーホルダープレゼント）を行いました。

当日雨天(結構強い)だったのにアカウミガメの上陸は天候に関係ないという視点から、全員ずぶぬれになりながら清掃作業を行いました。結果、翌日の早朝に清掃をした海岸に上陸産卵が有った事など・・・皆カメをとおしてかなり楽しんでおります。

但し、この王国の建国に先立っては、スタッフの過去2年にわたる上陸調査があったわけで、アカウミガメの上陸の事実は周知の事でも定量的には全く分からなかった上陸産卵の実態が分かった事で建国に至った事は言うまでもありません。

相良町は御前崎町の隣町であり、御前崎港の拡張工事、平成15年国体ヨット競技開催地、静岡空港開港の問題等、開発計画が目白押しで、これらが今後どのようにア

カウミガメの産卵に影響を与えるかという事も心配の種です。

特に、最近の砂浜の減少は激しく、20年前は相良海岸と御前崎海岸が砂浜で繋がっていたのが、最近ではその間約5kmについて全く砂浜が欠損してしまい、テトラポットの設置でやっと一部の砂浜が戻ってきたにしか過ぎません。

カメハメハ王国では、このような開発と自然の調和や我々の日常生活が、ひょっとしたら自然をふみにじっていないかなど、アカウミガメを軸にあらゆる角度から見つめてゆきたいと考えております。

山本明夫 (カメハメハ王国)

静岡県相良海岸アカウミガメ上陸産卵孵化報告 (1995-97)
 Reproduction of Loggerhead Turtles in the Sagara Beach, Shizuoka
 Prefecture (1995-1997)

増田茂夫・山本明夫
 Shigeo MASUDA and Akio YAMAMOTO

別の報告にて当カメハメハ王国の紹介をさせていただきましたが、調査を開始した1995年から昨年1997年の産卵状況をここに報告します。これまで御前崎より東の海岸でのまとまった産卵は報告されていませんでしたが、御前崎のすぐ北に位置する相良海岸では、過去3年の調査で毎年16-29回の産卵があることが明らかになりました。

総延長5kmの砂浜の内、北部は相良海水浴場や民宿街として開発されていますが、須々木とよばれる南側の地域は後背の松林も健全で、ウミガメの産卵地としては相対的に良好です。それに伴い、ウミガメの産卵もその大部分が西側に偏ります。ただし、四輪駆動車の乗り入れは激しく、夏

には砂浜が轍で被われ、ウミガメの繁殖への影響が心配されます。

相良海岸の産卵状況 (1995-97)

年	1997	1996	1995
上陸回数	36	16	33
産卵回数	23	16	29
最大産卵数	171	不明	不明
最少産卵数	99	不明	不明
産卵開始日	5/23	5/12	5/19
最終産卵日	8/21	9/6	8/17
最終上陸日	8/28	9/6	8/17

(カメハメハ王国)

第9回日本ウミガメ会議 参加申込書

氏名（フリガナ）

男 女

所属

連絡先住所 ㊦

電話

FAX

E-mail

公開シンポジウム 参加する 参加しない

20日夜の永田行きバス 利用する 利用しない

島内視察 参加する 参加しない

宿泊の予約 20日 21日 22日

弁当の予約 21日 22日

立場 小中高生 大学生 大学院生等 一般

第9回日本ウミガメ会議 講演申込書

口頭発表 ポスター発表

演題

発表者氏名（所在あるいは所属）：発表者には名前の前に○を付けて下さい。

使用機材 スライド OHP ビデオ

〆切：9月30日

送付先：

573-0106 大阪府枚方市長尾台3-26-18、日本ウミガメ協議会事務局
TEL:0720-59-5398 FAX:0720-59-6962: E-mail:JCG03011@nifty.ne.jp